

安達が原

他二篇



藍岩堂



安達が原他二篇



藍岩堂



殺生石

山姥の話

安達が原

殺生石

ごふかくさてんのう みよ げんのうおしょう とく たか ぼう にっぼん
むかし 後深草天皇 の御代に、 玄翁和尚 という徳の高い坊さんがありました。日本の
くにじゅうほうぼう ある ときおうしゅう みやこ かえ とちゅう しらかわ せき こ
國中 方々めぐり歩いて、ある時 奥州 から 都 へ帰ろうとする途中、 白河の関を越えて、
しもつけ なすの はら
下野の那須野の原にかかりました。

なすの はら り ほう ひろ ひろ はら あいだ けん いえ な
那須野の原というのは十里四方もある広い広い原で、むかしはその間に一軒の家も無く、
とお ほう み みわた かぎ くさ お しげ
遠くの方に山がうっすり見えるばかりで、見渡す限り草がぼうぼうと生い茂って、きつねやし
さび な げんのう はら とお おり あき すえ
かがその中で寂しく鳴いているだけでした。玄翁はこの原を通りかかると、折ふし秋の末の
か おばな しろ わた めん あいだ さ
ことで、もう枯れかけたすすき尾花が白い綿をちらしたように一面にのびて、その間に咲き
のこ のぎく さび
残った野菊やおみなえしが寂しそうにのぞいていました。

げんのうおしょう にちのはら ある ある はんぶん みじか あき
玄翁和尚 は一日野原を歩きどおしに歩いてまだ半分も行かないうちに、短い秋の日はも
く み み くら さき とま いえ み
う暮れかけて、見る見るそこらが暗くなってきました。この先いくら行っても泊る家を見つけ
こんや のじゆく こし
るあてはないのですから、今夜は野宿をするかくごをきめて、それにしても、せめて腰をかけて
やす かげ おも ゆう み ぼん
休めるだけの木の陰でもないかと思って、夕やみの中でしきりに見ましたが、一本のひよろひ
まつ た おも すこ くさはら ま なか
よ松さえ立ってはいませんでした。それでもと思ってまた少し行ってみると、草原の真ん中
た しろ み
に、大きな石の立っているのが白く見えました。

「やれやれ、これで露をしのぐだけの屋根が出来た。」

げんのう よ にんげん せい たか
と玄翁はつぶやきながら石のそばに寄ってみますと、ちょうど人間の背の高さぐらいのすべ
げんのう あたま かさ くさ むす
すべしたきれいな石でした。玄翁は石の頭に笠をかぶせ、草を結んでまくらにして、つえを
ひ よ よこ なに ま
わきに引き寄せたまま、ころりと横になりますと、何しろくたびれきっているものですから、間
ねむ
もなくとろとろと眠りかけました。

するとしばらくして、眠っているまくら元で、

おしょう おしょう
「和尚さま、和尚さま。」

よ こえ はじ ゆめ こえ き き
とかすかに呼ぶ声がしました。初めは夢うつつでその声を聞いていましたが、ふと気がつい
いちめん ま くら そら ほし ひか
て目をあけますと、もう一面の真っ暗やみで、はるかな空の上で、かすかに星が二つ三つ光っ
ているだけでした。

いま よ おも き まよ げんのう おも お
「すると今しがただれか呼んだと思ったのは、気の迷いであったか。」と玄翁は思って、起き
あ ね ほう
上がりもしずに、そのまま目をつぶって寝ようと思いました。するとまたうしろの方で、こんどは
まえ
前よりもはっきり、

おしょう おしょう
「和尚さま、和尚さま。」

よ こえ
と呼ぶ声がしました。

ましが げんのう おも お あ
こんどこそ間違いはないと玄翁が思って、ひょいと起き上がりますと、どうでしょう、さっき
ところ あか ひかり わか すがた
の石のあった所がほんのり明るくなって、そのかすかな光の中に若い女のような姿がぼん
み
やり見えていました。

げんのう む
玄翁もさすがにびっくりして、その女に向かって、
よ
「呼んだのはあなたですか。あなたはどなたです。」
とたずねました。

すると女はかすかに笑ったようでしたが、やがて、

せい
「びっくりなさるのはむりはありません。わたしはこの石の精です。」
といました。

せい まよ き なに ごよう ぐうぜん
「その石の精がどうして迷って出て来たのです。何かわたしに御用があるのでしょうか。偶然
ひとばん やど ねが れい なに あ なん
ながら、こうして一晩のお宿を願ったお礼に、何かして上げることがあれば何でもしまし
よう。」

げんのう
と玄翁はいました。

なみだ
すると女は涙をはらはらとこぼして、

あ がた ぼうさま はなし き いただ
「あなたは有り難いお坊様のようなので、くわしくわたしの話を聞いて頂いて、その上に
ねが き
お願いがあるのでございます。お聞きになったこともあるでしょうが、じつはわたしは、むかし
いん ごしょ め つか たまものまえ もの
ながしの院さまの御所に召し使われた玉藻前という者でございます。もとをいいますと
てんじく の す び ねん うつく にんげん ば
天竺の野に住んだ九尾のきつねでした。きつねは千年たつと美しい人間の女に化けるもの
ねん こう つ むすめ すがた てんらく
です。わたしも千年の功を積むと、きれいな娘の姿になりました。するとある日天羅国の
はんそくおう おう か かえ み ごてん つ かえ きさき
班足王という王さまが狩りの帰りにわたしを見つけて、御殿に連れ帰ってお后になさいま
なが あいだ じぶんにんげん おも だ
した。わたしは長い間きつねでいた時分人間にいじめられとおしてきたことを思い出して、
わる ところ ときてんらく てんさい じんみん こま
ふと悪い心がおこりました。そこである時天羅国にいろいろと天災がおこって人民が困って
はんそくおう はか かみ まいにち にん
いると、わたしは班足王にすすめて、これはお墓の神のたたりですから、これから毎日十人
くび き にち あいだ にん くび はか そな わざわ
ずつ人の首を切って、百日の間に千人の首をお墓に供えてよくおまつりなさい。きっと災
てんさい じゅうつ
いをのがれることができますといました。じつは天災というのもわたしが術をつかってさせ
おう し まいにちつみ じんみん
たのですが、王はこれを知らないものですから、わたしのいうとおりに、毎日罪のない人民を
にん ころ にん くび じんみん おう とときいつき お
十人ずつ殺して、千人の首をまつりました。すると人民が王をうらんで、ある時一揆を起こ
おう せ ころ み い ど
して王を攻め殺しました。そしてわたしを見つけて、生け捕りにしようとさわぎました。わたし
に だ なん ねん
はとうに逃げ出して、山の中にかくれました。そうして何百年かたちました。

そのうちわたしはまたシナの国に渡って、殷の紂王 というもののお妃 になりました。あの
 紂王 にすすめて、百姓 から重いみつぎものを取り立てさせ、非道の奢りにふけったり、
 罪もない民をつかまえて、むごたらしいしおきを行 ったりした姫妃というのは、わたしのこと
 でした。紂王 がほろぼされると、わたしはまた山の中にかくれて、何百年か暮らしました。
 おしまいに日本の国に来て、院さまのお召し使いの女になって、玉藻前 と名のりました。
 わたしをおそばへお近づけになってから、院さまは始終 重いお病 におなやみになるようにな
 りました。院さまのお命 をとって、日本の国をほろぼそうとしたわたしのたくらみは、だん
 だん 成就 しかけました。それを見破ったのは陰陽師 の安倍の泰成 でした。わたしはとうとう
 泰成 のために祈り伏せられて、正体 を現 してしまいました。そしてこの那須野の原に逃げ
 込んだのです。けれども日本は弓矢の国でした。天竺でも、シナでも、一度山か野にかくれれ
 ばもうだれも追いかけて来る者はなかったのですが、こんどはそういきませんでした。間もなく
 院さまは三浦の介と千葉の介と二人の武士においつけになって、何百騎の侍 で那須野の原
 を狩り立ててわたしを射させました。わたしはもう逃げ道がなくなって、とうとう二人の武士の
 矢先にかかって倒れました。けれども体 だけはほろびても、魂 はほろびずに、この石になっ
 て残りました。わたしの根ぶかい悪念 は石になってもほろびません。石のそばに寄るものは、人
 でも獣 でも毒にあたって倒れました。みんなは殺生石 といって、おそれてそばへ寄るもの
 はありませんでした。それが今夜あなたに限って、殺生石 のそばに夜を明かしながら、何に
 も災いのかからないのはふしぎです。これはきっと仏 さまの道を深く信じていらっしやる
 功德に違いありません。あなたのような尊いお上人 さまにお目にかかったのは、わたしのし
 あわせでした。どうかあなたのあらたかな法力で、わたしをお救いなすって下さいませんか。
 わたしはもう自分ながら自分の深い罪と迷いのために、このとおりの石になってもなお苦しんで
 いるのでございます。」

こういって、女はほっとため息をつきました。

玄翁はだまって、じっと目をつぶったまま、女の話 を聴いていました。やがて女の長い話
 がおしまいになりますと、静かに目をあいて、やさしく女の姿 を見ながら、
 「うん、うん、分かった。わたしの力の及ぶだけはやってみよう。安心して帰るがいい。」
 といいました。

女はにっこり笑って、すっとかき消すように見えなくなりました。

そうこうするうちに、いつか夜がしらしら明けはなれてきました。玄翁 ははじめてそこらを

みまわ しろ た み ちょう
見回しますと、石はゆうべのままに白く立っていました。見ると石のまわりには、二三町の
あいだ くさ は ことり むし なん かさ あ し
間 ろくろく草も生えてはいませんでした。そして小鳥や虫が何千となく重なり合って死んで
いました。

げんのう いまさらせっしょうせき どく し
玄翁は今更 殺生石 におそろしい毒のあることを知って、ぞっとしました。

あか のぼ くさ つゆ かがや だ
もうすっかり明るくなって、日が昇りかけました。草の上の露がきらきら輝き出しました

げんのう せっしょうせき まえ すわ ねっしん きょう よ せっしょうせき れい
玄翁は 殺生石 の前に座って、熱心にお経を読みました。そして 殺生石 の霊をまつつ
てやりました。 殺生石 がかすかに動いたようでした。

きょう げんのう た あ じゅもん とな も ど
やがてお経がすむと、玄翁は立ち上がって、呪文を唱えながら、持っていたつえで三度石
をうちました。すると静かに石は真ん中から二つにわれて、やがて霜柱がくずれるように、ぐ
さぐさといくつかに小さくわれていきました。

のちたび せっしょうせき とお わざわ
その後旅の人が 殺生石 のそばを通っても、もう災いはおこらなかつたそうです。

山姥の話

ふゆ さむ まご うまきち まち だいこん うま りさき じぶん むら
冬の寒い日でした。馬子の馬吉が、町から大根をたくさん馬につけて、三里先の自分の村
かえ
まで帰って行きました。

まち あか ひるなか ふゆ はんぶん こ
町を出たのはまだ明るい昼中でしたが、日のみじかい冬のことから、まだ半分も来な
く むら はい こ
いうちに日が暮れかけてきました。村へ入るまでには山を一つ越さなければなりません。ちょう
どその山にかかった時に日が落ちて、夕方のつめたい風がざわざわ吹いてきました。馬吉は
なん
何だかぞくぞくしてきましたが、しかたがないので、心の中に観音さまを祈りながら、
いっしょうけんめい うま お とちゆう き とき
一生懸命馬を追って行きますと、ちょうど山の途中まで来かけた時、うしろから、
うまきち うまきち
「馬吉、馬吉。」

だ よ もの
と、出しぬけに呼ぶ者がありました。
こえ き うまきち えりもと みず なん
その声を聞くと、馬吉は、襟元から水をかけられたようにぞっとしました。何でもこの山に
やまうば す い つた むかし つた つた うまきち
は山姥が住んでいるという言い伝えが、昔からだれ伝えとなく伝わっていました。馬吉
なん やまうば おも
もさっきからふいと、何だかこんな日に山姥が出るのではないか、と思っていたやさきでした
よ ふ かえ ゆうき なん へんじ かぎ おも
から、もう呼ばれて振り返る勇氣はありません。何でも返事をしないに限ると思って、だまっ
うま ひ き うま じぶん
てすたすた、馬を引いて行きました。ところがどういうものか、気ばかりあせって、馬も自分
おも すす けん
も思うように進みません。五六間行くと、またうしろから、
うまきち うまきち
「馬吉、馬吉。」

よ こえ き こえ ちか
と呼ぶ声が聞こえました。しかもせんよりはずっと声が近くなりました。
うまきち おも みみ ふたあしみあし みみ
馬吉は思わず耳をおさえて、目をつぶって、だまって二足三足行きかけますと、こんどは耳
のはたで、

うまきち うまきち
「馬吉、馬吉。」
よ こえ うまきち おも
と呼ばれました。その声があんまり大きかったので、馬吉ははっとして、思わず、
「はい。」
ふ む おどろ けん
といいながら、ひょいとうしろを振り向くと驚きました、もう一間とへだたっていないうし
いろ きもの き かお
ろに、ねずみ色のぼろぼろの着物を着て、やせっこけて、いやな顔をしたおばあさんが、ずっと
た うまきち かお み わら
そこに立っているのです。そして馬吉の顔を見ると、にたにたと笑って、やせたいやらしい
手で、「おいで、おいで。」をしました。
うまきち
馬吉は、
「あッ。」

といたなり、そこに立ちすくんでしまいました。するとおばあさんはずんずんそばへ寄って
きて、

「馬吉、馬吉。大根をおくれ。」

といました。馬吉がだまって大根を一本抜いて渡しますと、おばあさんは耳まで裂けてい
るかと思うような大きな、真っ赤な口をあいて、大根をもりもり食べはじめました。もりもり
かむたんびに、赤い髪の毛が、一本一本逆立ちをしました。

いうまでもなく、それは山姥でした。

山姥は見る見る一本の大根を食べてしまって、また「もう一本。」と手を出しました。それ
から二本、三本、四本と、もらっては食べ、もらっては食べ、とうとう馬の背中にのせた百本
あまりの大根を、残らず食べてしまうと、もうとっぷり日が暮れてしまいました。

ありったけの大根を残らずやってしまったので、馬吉はあとをも見ずに、馬の口をぐいぐい
ひっぱって、駆け出して行こうとしました。一生懸命 駆け出して、やっと一町も逃げたと思
うころ、山姥は大根を残らず食べてしまって、またどんどん追っかけて来ました。間もなく追
いつくと、こんどは、

「馬の足を一本。」

といました。もう馬吉は生きていない空はありません。しかたがないので、これもぶるぶるふ
るえている馬を山姥にあずけたまま、から身になって、どんどん、どんどん、駆け出しました。
するとどうしたものか、気がせくのと、道が暗いので、よけいあわてて、どこかで道を間違えた
ものとみえて、いくら駆けても駆けても、里の方へは降りられません。行けば行くほど山が深
くなって、もうどこをどう歩いているのか、まるで知らない山の中の道を、心細くたどって行
くばかりでした。

とうとう山がついて谷のような所へ出ました。ひよいと見ると、そこに一軒うちらしいもの
の形が、夜目にもぼんやり見えました。何でもいい、とにかく入って、わけを話して、今夜は
たのんで泊めてもらおうと思って、うちの前まで来るとすぐ、とんとん、戸をたたきました。で
も中はしんと静まりかえって、明り一つも来てきません。ぐずぐずしているうちに、山姥が追
っかけて来て、見つけられては大へんだと思って、馬吉はかまわず戸をあけて、中へ入りま
した。

入ってみると、中は戸障子もろくろくない、右を向いても、左を向いても、くもの巣だら
けの、ひどいあばら家でした。

「なるほど、これではいくらたたいても返事をしないはずだ。人の住んでいないうちなのだ。そ
れでもしかたがない。今夜はそとここにかくれて、夜の明けるのを待つことにしよう。」

ひと ごと と、独り言をいいながら、うまきち あ 馬吉はそっと上がっていきますと、そこはそれでも二階家で、上
ものおき
は物置のようになっていました。

おな かい ほう ようじん 「同じかくれるにしても、二階の方が用心がいい。」と思つて、おも うまきち かい あ
馬吉は二階に上がつて、そ
たたみ よこ よこ
とすすだらけな畳の上にごろりと横になりました。横になつて、どうかして眠ろうとしまし
ねむ
たが、何だか目がさえて眠られませんが、しじゅうそと ものおと き と
始終外の物音ばかりに気を取られて、胸をどきどき
むね
させていました。

するとその晩夜中過ぎになって、しっかりしめておいたはずのおもての戸がひとりでにすうつとあいて、だれかが入って来た様子です。

「はてな。」と思って、馬吉がこわごわはい出して、二階からそっとのぞいてみますと、折からさし込む月の光で、さっきの山姥が、台所のお釜の前に座って、ひとり言をいっているのが見えました。

「今日は久し振りでごちそうだったなあ。大根もうまかった。馬もうまかった。あれでうっかりして、馬吉に逃げられなければ、なおよかったのだけれど、残念なことをした。」

馬吉はそれを聞くと、ぶるぶるふるえ上がって、頭をおさえてちぢこまってしまいました。

しばらくすると、山姥は大きな口をあいて、大あくびをして、

「ああ、くたびれた。眠くなった。今夜はどこに寝ようかな、臼の中にしようか。釜の中にしようか。下に寝ようか。二階に寝ようか。そうだ、涼しいから二階に寝よう。」

といました。

馬吉は「もうこんどこそは助からない。」と思いました。「山姥のやつ、おれが上にいるのを知って、上がってきて食べるつもりだろう。ああ、もうどうしようもない。観音さま、観音さま、どうぞお助け下さいまし。」

こう心の中に念じながら、今にも山姥が上がってくるか、上がってくるかと待っていました。

ところが山姥は、すぐにはなかなか上がってきませんでした。やがてまた大きなあくびをして、

「二階に寝ればねずみがさわぐ。臼の中はくもの巣だらけ。釜の中は温かで、用心がいちばんいい。そうだ、やっぱり釜の中に寝よう。」

と、ひとり言をいいながら、大きなお釜のふたを取って、中に入ったかと思うと、やがてぐうぐう、ぐうぐう、高いびきで眠ってしまいました。

二階からこの様子を見ていた馬吉は、そっとはしご段を下りました。そして抜き足差し足お庭へ出て、いちばん大きな石を抱え上げて、「うんすん、うんすん。」いいながら、運んで来ました。そして「うんとこしょ。」と、石をお釜の上ののせて、上から重しをしてしまいました。

お釜の中からはあいかわらず、ぐうぐう、ぐうぐう、高いびきが聞こえました。お釜に重しをしてしまうと、こんどはまた、お庭から枯れ枝をたくさん集めて来て、小さく折っては、お釜の下に入れました。

か えだ お おと ね やまうば みみ き やまうば かま
ぴしりぴしり枯れ枝を折る音が、寝ている山姥の耳に聞こえたともえて、山姥はお釜の
中で、

あめ ふ よ むし な
「雨の降る夜は虫が鳴く。

な なにむし
ちいちい鳴くのは何虫か。

むし な な あめ ふ
虫よ鳴け、鳴け、雨が降る。

ぱらぱら、ぱらぱら、^{あめ ふ}雨が降る。」

^{うた}
と歌いました。

やまうば ^{こころも} 山姥がいい心持ちそうに、^{か えだ おと あめ おと おも き}ぱちぱちいう枯れ枝の音を雨の音だと思って聞いていますと、
^{ま うまきち か えだ かま}その間に馬吉は枯れ枝に火をつけました。お釜のそこがだんだんあつくなってきた、そのうち

^{こ やまうば}じりじり焦げてきたので、さすがの山姥もびっくりして、

「おお、あつい。」

^{と あ も あ だ}とって飛び上がりました。そしていきなりふたを持ち上げてとび出そうとしますと、上から
^{おも みうご やまうば かま}重しがのしかかっている、身動きができません。山姥はおこって、お釜の中で、「きゃッ、

^{くる}きゃッ。」とさけびながら、狂いまわりました。

^{うまきち か えだ も}馬吉はかまわずどんどん枯れ枝を燃やしなから、

^{うまく}「馬喰うばあはどこにいる。

^{さむ た}寒けりやどんどん焚いてやる。

^{ほね}あつけりや火になれ、骨になれ。」

^{うた}
と歌いました。

^{かま ま か や じぶん やまうば じゅうひ}とうとうお釜が上まで真っ赤に焼けました。その時分には、山姥もとうにからだ中火にな
^{ほね}って、やがて骨ばかりになってしまいました。

むかしあるところに、お ^{ひやくしょう}百姓のおとうさんとおかあさんがありました。夫婦の ^{ふうふ あいだ}間には十
になるかわいらしい女の子がありました。ある日おとうさんとおかあさんは、野らへお ^{ひやくしょう}百姓
の ^{とき}しごとをしに行く ^{ひとり}時に、女の子を一人お留守番に ^{のこ}残して、
「だれが ^き来て ^ともけっして戸をあけてはならないよ。」

といいつけて、^{かぎ}鍵をかけて出て行きました。

女の子は一人 ^{ひとり}ぼっち ^{のこ}り残されて、さびしく ^{こころぼそ}って心細く ^{ちい}てしかたがありませんから、小
さ ^{おと}くなって ^{ひる}いろりに ^{そと}あたっていました。するとお昼 ^とごろになって、外の戸をとんとん、たたく音
が ^{おと}しました。

「だあれ。」

と、女の子が ^{おと}いいました。

「わたしだよ。 ^{おと}すぐにあけておくれ。」

と、おばあさんらしい ^{こえ}声が ^き聞こえました。

「でもあけてはいけないんだって、おとうさんとおかあさんが ^{おと}そう ^{やぶ}いったから。」

と、女の子は ^{おと}いいました。

「何 ^{なん}だって。よしよし、あけてくれなければ、この ^と戸 ^{やぶ}を ^{おと}け ^{やぶ}破 ^{やぶ}ってやる。」

こう ^{おと}いっていきなり ^{うご}戸に ^{りょうあし}手を ^{りょうあし}かけて、 ^{りょうあし}みり ^{りょうあし}みり ^{りょうあし}動 ^{りょうあし}かし ^{りょうあし}ながら、 ^{りょうあし}両 ^{りょうあし}足 ^{りょうあし}で ^{りょうあし}ど ^{りょうあし}ん ^{りょうあし}ど ^{りょうあし}ん、 ^{りょうあし}ど ^{りょうあし}ん ^{りょうあし}ど ^{りょうあし}ん、
け ^{こま}つ ^{こま}け ^{こま}ました。女の子は ^{こま}び ^{こま}っくり ^{こま}して、 ^{こま}困 ^{こま}って、 ^{こま}しか ^{こま}た ^{こま}が ^{こま}ない ^{こま}もの ^{こま}です ^{こま}から、 ^{こま}戸 ^{こま}を ^{こま}あ ^{こま}けて ^{こま}や ^{こま}り ^{こま}ま ^{こま}し ^{こま}た。

戸 ^とをあ ^とけると、 ^{かお}ぬ ^{やまうば}っと、 ^{はい}お ^きそろ ^ろしい ^{あし}顔 ^だをした ^だ山 ^だ姥 ^だが ^だ入 ^だって ^だ来 ^だて、 ^だ炉 ^だば ^だた ^だに ^だ足 ^だを ^だな ^だげ ^だ出 ^だして、

「お ^{さむ}お、 ^{さむ}寒 ^{さむ}い、 ^{さむ}寒 ^{さむ}い。」

と ^{さむ}い ^{さむ}い ^{さむ}ました。

「お ^{なに}ば ^きあ ^きさん、 ^き何 ^きし ^きに ^き来 ^きた ^きの。」

と、女の子は ^{おと}た ^{おと}ず ^{おと}ね ^{おと}ま ^{おと}し ^{おと}た。

「お ^{はや}な ^{ごはん}か ^{したく}が ^{したく}す ^{したく}い ^{したく}た。 ^{したく}早 ^{したく}く ^{したく}御 ^{したく}飯 ^{したく}の ^{したく}支 ^{したく}度 ^{したく}を ^{したく}し ^{したく}ろ。」

と、 ^{やまうば}山 ^{かお}姥 ^{かお}は ^{かお}こ ^{かお}わ ^{かお}い ^{かお}顔 ^{かお}を ^{かお}し ^{かお}て ^{かお}い ^{かお}い ^{かお}つ ^{かお}け ^{かお}ま ^{かお}し ^{かお}た。

女の子は ^{だいどころ}ぶ ^{ごはん}る ^{はい}ぶ ^もる ^きぶ ^きる ^きえ ^きな ^きが ^きら、 ^き台 ^き所 ^きへ ^き行 ^きっ ^きて、 ^き御 ^き飯 ^きの ^きい ^きっ ^きぱ ^きい ^き入 ^きっ ^きた ^きお ^きは ^きち ^きを ^き持 ^きっ ^きて ^き来 ^きま ^きし ^きた。 ^{ごはん}山 ^{ごはん}姥 ^{ごはん}は ^{ごはん}お ^{ごはん}は ^{ごはん}ち ^{ごはん}の ^{ごはん}ふ ^{ごはん}た ^{ごはん}を ^{ごはん}あ ^{ごはん}け ^{ごはん}て、 ^{ごはん}手 ^{ごはん}づ ^{ごはん}か ^{ごはん}み ^{ごはん}で ^{ごはん}せ ^{ごはん}っ ^{ごはん}せ ^{ごはん}と ^{ごはん}御 ^{ごはん}飯 ^{ごはん}を ^{ごはん}つ ^{ごはん}め ^{ごはん}こ ^{ごはん}み ^{ごはん}な ^{ごはん}が ^{ごはん}ら、 ^{ごはん}た ^{ごはん}く ^{ごはん}あ ^{ごはん}ん ^{ごはん}を ^{ごはん}ま ^{ごはん}る ^{ごはん}ご ^{ごはん}と、 ^{ごはん}も ^{ごはん}り ^{ごはん}も ^{ごはん}り ^{ごはん}か ^{ごはん}じ ^{ごはん}っ ^{ごはん}て ^{ごはん}い ^{ごはん}ま ^{ごはん}し ^{ごはん}た。 ^{あいだ}その ^ぬ間 ^だに ^に女 ^にの ^に子 ^には、 ^にそ ^にっ ^にと ^にう ^にち ^にか ^にら ^に抜 ^にけ ^に出 ^にし ^にて、 ^に逃 ^にげ ^にて ^に行 ^にき ^にま ^にし ^にた。

ど ^にん ^{やま}ど ^くん ^{ごはん}逃 ^たげ ^{やまうば}て ^{やまうば}行 ^{やまうば}っ ^{やまうば}て、 ^{やま}山 ^くの ^{ごはん}下 ^たま ^{やまうば}で ^{やまうば}来 ^{やまうば}ると、 ^{やまうば}御 ^{やまうば}飯 ^{やまうば}を ^{やまうば}食 ^{やまうば}べ ^{やまうば}て ^{やまうば}し ^{やまうば}ま ^{やまうば}つ ^{やまうば}た ^{やまうば}山 ^{やまうば}姥 ^{やまうば}が、 ^{やまうば}い ^{やまうば}く ^{やまうば}ら ^{やまうば}さ ^{やまうば}が ^{やまうば}し ^{やまうば}て

も女の子がいないので、^{たい}大そうおこって、

「おう、おう。」

といいながら追っかけて来ました。ずいぶん ^{いっしょうけんめい}一生懸命 駆けたのですけれど、^{やまうば}山姥の足に小さな女の子がかなうはずはありませんから、^おずんずん追いつかれて、もう一足で^{ひとあし}山姥に肩をつかまれそうになりました。女の子は^{むちゆう}夢中で ^{いっしょうけんめい}一生懸命 逃げますと、^{せなか}山の上からしばを背中にしよって下りて来るおじいさんに出あいました。

「おじいさん、おじいさん。 ^{やまうば}山姥が追っかけて来るから ^{たす}助けて ^{くだ}下さい。」

と、女の子はいいました。おじいさんは、

「よし、よし。」

といって、^{せなか}背中のしばを下ろして、その中に女の子をかくしました。

すると ^{やまうば}山姥が追っかけて来て、おじいさんに、女の子はどこへ行ったとたずねました。おじいさんがわざと、「あそこに。」といって、^む向こうに ^つ積んである ^{ゆび}しばを ^{やまうば}指さしますと、^{やまうば}山姥はいきなりそのしばに ^だ抱きつきました。するとそのしばは ^{がけ}ちょうど ^た崖の上に立ってかけてあったものですから、^{やまうば}山姥は ^{じぶん}自分の ^{おも}からだの ^{かか}重みで、しばを ^{たに}抱えたまま、 ^おころころと ^お谷そこへ ^おころげ落ちました。そのひまに女の子は ^にどんどん ^{やまうば}逃げて ^{たに}行きました。すると ^あ山姥は ^あまた ^あ谷そこからは ^あい上

って、「おう、おう。」といいながら、あとから追っかけて行きました。

女の子がまた ^{いっしょうけんめい}一生懸命 逃げますと、^{ひとり}また一人のおじいさんが、^かそこで ^かかやを ^{かく}刈っていました。

「おじいさん、おじいさん。 ^{やまうば}山姥が来るから ^{たす}助けて ^{くだ}下さい。」

と、女の子がいいますと、おじいさんは「よし、よし。」と、^か刈ってある ^{かく}かやの中に ^{かく}隠して ^{かく}くれました。

^{やまうば}やがて ^お山姥が追っかけて来ますと、おじいさんは ^むわざと ^{がけ}向こうの ^{がけ}崖の上にある ^かかやの ^かたばを ^{ゆび}指さしました。 ^{やまうば}山姥が ^{むしやぶ}いきなり ^{むしやぶ}かやの ^{むしやぶ}たばに ^{むしやぶ}武者 ^{むしやぶ}振り ^{むしやぶ}つ ^{むしやぶ}き ^{むしやぶ}ますと、 ^{むしやぶ}はず ^{むしやぶ}み ^{むしやぶ}です ^{むしやぶ}べ ^{むしやぶ}って、 ^{むしやぶ}ころ ^{むしやぶ}ころ ^{むしやぶ}と ^{むしやぶ}谷 ^{むしやぶ}そこ ^{むしやぶ}に ^{むしやぶ}ころ ^{むしやぶ}が ^{むしやぶ}り ^{むしやぶ}ま ^{むしやぶ}した。 ^{むしやぶ}その ^{むしやぶ}間 ^{むしやぶ}に ^{むしやぶ}女 ^{むしやぶ}の子 ^{むしやぶ}は、 ^{むしやぶ}また ^{むしやぶ}ど ^{むしやぶ}ん ^{むしやぶ}ど ^{むしやぶ}ん ^{むしやぶ}逃 ^{むしやぶ}げ ^{むしやぶ}て ^{むしやぶ}行 ^{むしやぶ}き ^{むしやぶ}ま ^{むしやぶ}した。

そのうちとうとう大きな沼のふちに出ました。やがて山姥も谷そこからはい上がって、また追っかけて来ました。女の子はもうこの先逃げて行くことができなくなって、沼のふちに立っている大きな樫の木の上に登りました。すると山姥が追っついて来て、

「どこへ行った、どこへ行った。どこまで逃げたって逃がすものか。」

といいながら、きよろきよろそこらを見まわしますと、木の上に登っている女の子の姿が、沼の水にうつりました。山姥はいきなりそのうつった姿をめがけて、沼の中に飛び込みました。

女の子はその間に木の上から飛び下りて、沼の岸のくまざさを分けて、逃げて行きますと、一軒の小屋がありました。中へ入ると、若い女の人が一人、留守番をしていました。女の子はこの女の人に、山姥に追われて来たことを話して、石の櫃の中へかくしてもらいました。

すると間もなく、山姥はまた沼から上がって、どんどん追っかけて来ました。そして小屋の中に入って来て、

「女の子が逃げて来たろう。早く出せ。」

とどなりました。

「だってわたしは知らないよ。」

すると山姥は疑い深そうに、鼻をくくん鳴らして、

「ふん、ふん、人くさい、人くさい。」

といいました。

「なあに、それはわたしが雀を焼いて食べたからさ。」

「そうか。そんなら少し寝かしておくれ。あんまり駆けてくたびれた。」

「おばあさん、おばあさん。寝るのは石の櫃にしようか、木の櫃にしようか。」

「石の櫃はつめたいから、木の櫃にしようよ。」

こう山姥は行って、木の櫃の中に入って寝ました。

山姥が櫃の中に入ると、女は外からぴんと錠を下ろしてしまいました。そして石の櫃の中から女の子を出してやって、

「山姥を木の櫃の中に入れてしまったから、もう大丈夫だ。」

といって、太い錐を出して、火の中につっ込んで真っ赤に焼きました。この焼いた錐を木の櫃の上からさし込みますと、中で山姥が寝ぼけた声で、

「何だ、二十日ねずみか、うるさいぞ。」

といました。その間に女は櫃に穴をあけて、ぐらぐら煮え立っているお湯を穴からつぎ込みますと、中で、

「あつい、あつい。」

とさけびながら、山姥はどろどろに煮えくずれて、死んでしまいました。女は山姥を殺して、女の子とっしょにうちへ帰りました。この人ももとは山姥にさらわれて、こんな所に来ていたのです。

安達が原

むかし、^{きょうと}京都から^{しよこくしゆぎよう}諸国修行に出た^{ぼう}坊さんが、^{しらかわ}白河の^{せき}関を^こ越えて^{おうしゆう}奥州に^{はい}入りました。
^{いわきのくに}磐城国の^{ふくしま}福島に^{ちか}近い^{あだち}安達が^{はら}原という^{はら}原にかかると、^{みじか}短い^{あき}秋の日が^くとっぴり暮れました

坊さんは一日^{ぼう}寂しい^{にちさび}道を^{みち}歩きつづ^{ある}げに^{ある}歩いて、おなかは^{かわ}すくし、のどは^{なに}渴くし、何よりも
^{あし}足が^{さきある}ぐたびれ^{ある}きって、この^{ひやくしやうや}先歩きたくも^み歩かれ^みなくなりました。どこぞに^{みわた}百姓家でも^{かぎ}見つけ
^{しだい}次第、^{たの}頼んで^{ひとばんと}一晩^{おも}泊めて^{おり}もらおうと思いましたが、^{はら}折あしく^{みわた}原の中にかか^{かぎ}って、見渡す^み限り
^{くさ}ぼうぼうと^お草ばかり^{しげ}生い茂^{あき}った^の秋の^の野末^ののけ^のしきで、それらしい^{けむり}煙の^あ上がる^{うち}家も^み見えません
^{のじゆく}。もうどうしようか、いっそ^の野宿^のときめようか、それにしてもこうおなかが^{おも}すいては^{おも}やりきれ
^{みず}ない、せめて^の水でも^{うち}飲まして^{このころ}くれる^{ほそ}家は^{おも}ないかしらと、心細く^{おも}思いつづ^{おも}けながら、とぼとぼ
^{ある}歩いて^む行きますと、ふと^{あか}向こうに^みちらりと^み明りが一つ^み見えました。

「やれやれ、^あ有り^{がた}難い、^{たす}これで^{おも}助かった。」と^{いっしやうけんめいあか}思っ^{めあ}て、一生懸命^{めあ}明りを^{めあ}目当てに^{めあ}たどって^{めあ}行
^{うち}きますと、なるほど^{のなか}家があるには^やありましたが、これは^{のき}また^{のき}ひどい^{のき}野中の^{のき}一つ^{のき}家で、^{のき}軒は^{のき}くずれ
^{はしら}、^{うち}柱は^なかたむいて、^や家という^やのも^{ぼう}名ばかり^どの^どひどい^どあばら^ど家^どでしたから、^ど坊さんは^ど二度^どびっく
^{はい}りして、^{はい}さすがに^{はい}すぐとは^{はい}中へ^{はい}入りか^{はい}ねて^{はい}いました。

すると中では、^{やぶ}かすかな^{あんどん}破れ^ほ行灯^{ひとり}の^{ひとり}火^{ひとり}かげで、^{いと}一人^くのおばあ^{いと}さんが^くしきりと^{いと}糸^くを^{いと}繰^くっている
^{ようす}様子^{ときしやうじ}でしたが、その^{やぶ}時^{かお}障子^だの^だ破れ^だから^だやせた^だ顔^だを出して、

「^{ぼう}もしも、^{なに}お坊さま、^{なに}そこに^{なに}何を^{なに}して^{なに}おいで^{なに}だえ。」

^{こえ}と^{こえ}声^{こえ}をかけ^{こえ}ました。

^だ出し^ぬ抜け^よに^よ呼び^よかけ^よられたので、^{ぼう}坊さんは^{おも}思^{おも}わず^{おも}ぎ^{おも}よ^{おも}っと^{おも}し^{おも}ながら、

「^{はら}ああ、^くおばあ^{とま}さん。じつは^{うち}この^{こま}原^{もの}の中^{もの}で^{もの}日^{もの}が^{もの}暮^{もの}れたので、^{もの}泊^{もの}る^{もの}家^{もの}が^{もの}なく^{もの}って^{もの}困^{もの}っている^{もの}者^{もの}
^{こんやひとばん}です。今夜^と一晩^{いただ}どうかして^{いただ}泊^{いただ}めては^{いただ}頂^{いただ}けます^{いただ}まいか。」

と^いい^いました。

すると^いおばあ^いさんは、

「^{こま}おやおや、それは^{はら}お困^{けんや}り^とだ^{もう}らう。だが^とごらん^とのとおり^と原^と中^との一^と軒^と家^とで、^とせ^とっ^とか^とく^とお^と泊^とめ^と申^とし
^きても、^{ふとん}着^{まい}て^{まい}ね^{まい}る^{まい}布^{まい}団^{まい}一^{まい}枚^{まい}も^{まい}あ^{まい}り^{まい}ま^{まい}せ^{まい}ん^{まい}よ。」

と^いこ^いと^いわ^いり^いま^いした。

^{ぼう}坊^{ようす}さんは^{しんせつ}おばあ^{あんしん}さんが^{あんしん}そ^{あんしん}う^{あんしん}い^{あんしん}う^{あんしん}様^{あんしん}子^{あんしん}の^{あんしん}親^{あんしん}切^{あんしん}そ^{あんしん}う^{あんしん}な^{あんしん}の^{あんしん}に、^{あんしん}や^{あんしん}っ^{あんしん}と^{あんしん}安^{あんしん}心^{あんしん}し^{あんしん}て、

「^{あめつゆ}いえ^{ふとん}いえ、^{しんばい}雨^{しんばい}露^{しんばい}さ^{しんばい}え^{しんばい}し^{しんばい}の^{しんばい}げ^{しんばい}ば^{しんばい}け^{しんばい}っ^{しんばい}こ^{しんばい}う^{しんばい}です。布^{しんばい}団^{しんばい}な^{しんばい}ん^{しんばい}ぞ^{しんばい}の^{しんばい}心^{しんばい}配^{しんばい}は^{しんばい}い^{しんばい}り^{しんばい}ま^{しんばい}せ^{しんばい}ん^{しんばい}か^{しんばい}ら、^{しんばい}ど^{しんばい}う^{しんばい}ぞ^{しんばい}お
^とと^{くだ}泊^{くだ}め^{くだ}な^{くだ}す^{くだ}っ^{くだ}て^{くだ}下^{くだ}さい。」

たの
と頼みました。

おばあさんはにこにこ笑いながら、

「まあまあ、そういうわけなら、御不自由でも今夜は家に上がってゆっくり休んでおいでなさい。」

といて、坊さんを上へ上げてくれました。

坊さんは度々お礼をいいながら、わらじをぬいで上へ上がりました。おばあさんは、囲炉裏にまきをくべて、暖かくしてくれたり、おかゆを炊いてお夕飯を食べさせてくれたり、いろいろ親切にもてなしてくれました。それで坊さんも、見かけによらないこれはいい家に泊り合わせたと、すっかり安心して、くり返しくり返しおばあさんにお礼をいっていました。

お夕飯がすむと、坊さんは炉端に座って、たき火にあたりながら、いろいろ旅の話をしなすと、おばあさんはいちいちうなずいて聞きながら、せつせと糸車を回していました。そのうちだんだん夜が更けるに従って、たださえあばら家のことですから、外の冷たい風が遠慮なく方々から入り込んで、しんしんと夜寒が身にしみます。けれどあいにくなことには、炉の方の火がだんだん心細くなって、ありったけのまきはとうに燃やしつくしてしまいました。

おばあさんはふと坊さんの寒そうにふるえているのを見つけて、

「おやおや、まきがみんなになりましたか。お客様があると知ったらもっとたくさん取っておけばよかったものを、気のつかないことをしました。どれどれ、ちょっと裏の山へ行ってみてまきを取って来ますから、お坊さま、しばらく退屈でもお留守番をお頼み申します。」

こういっておばあさんは気軽に出行こうとしました。

すると坊さんはたいそう気の毒がって、

「いやいや、この夜更けにそんな御苦労をかけてはすみません。何ならわたしが一走り行って取って来ましょう。」

といいますと、おばあさんは手をふって、

「どうして、とんでもない。旅の人に分かるものではない。まあまあ、何にもごちそうのない一ツ家のことだから、せめてたき火でもごちそうのうちだと思ってもらいましょう。」

といいいい出かけて行きましたが、何と思ったのか戻って来て、

「その代わりお坊さま、しっかり頼んでおきますがね、わたしが帰ってくるまで、あなたはそこにじっと座っていて、どこへも動かないで下さいよ。うっかり動いて、次の間をのぞいたりなんぞしてはいけませんよ。」

とくり返し、くり返し、念を押しました。

「どういうわけだか知らないが、むろん用もないのに、人の家の中なんぞをかってにのぞいたり

なんぞしませんから、^{あんしん}安心^{くだ}して下さい。」

^{ぼう}と坊さんもいいました。

それでおばあさんも^{あんしん}安心したらしく、そのまま出ていきました。

さておばあさんが出て行ってしまおうと、坊さんはただ一人、しばらくはつくねんと炉端に座ったままおばあさんの帰りを待っていましたが、じき帰ると思ったおばあさんはなかなか帰って来ません。何しろ西も東も分からない原中の一軒家に一人ぼっち残り残されたのですから、心細さも心細いし、だんだん心配になってきました。何でも安達が原の黒塚には鬼が住んでいて人を取って食うそうだななどという、旅の間にもふと小耳にはさんだうわさを急に思い出すと、体中の毛穴がぞっと一時に立つように思いました。そういえばこんな寂しい原中におばあさんが一人住んでいるというのもおかしいし、さっき出がけに、妙なことをいって度々念を押して行ったが、もしやこの家が鬼のすみかなのではないかしらん。いったい「見るな。」といった次の間には何があるのか知らん。こう思うと、こわさはこわいし、気にはなるし、だんだんじっとして辛抱していられなくなりました。それでもあれほど固く「見るな。」といわれたものを見ては、なおさらどんな災難があるかもしれません。

坊さんはしばらく見ようか、見まいか、立ったり座ったり迷っていましたが、おばあさんはやっぱり帰って来ないので、とうとう思いきって、そっと立って行って、次の間のふすまをあけました。

すると坊さんは驚いたの、驚かないのではありません。あけるといっしょに中からぶんと血なまぐさいにおいが立って、人間の死骸らしいものが天井まで高く積み重ねてありました。そしてくずれてどろどろになった肉が血といっしょに流れ出していました。

坊さんは「あっ。」といったなり、しばらく腰を抜かして目ばかり白黒させたまま起き上がることもできませんでした。そのうちふと気がつくのと、これこそ話にきいた一つ家の鬼だ、ぐずぐずしているととんでもないことになると思って、あわててわらじのひもを結ぶひまもなく逃げ出そうとしました。けれども今にもうしろから鬼婆に襟首をつかまれそうな気がして、気ばかりわくわくして、腰がわなわなふるえるので、足が一向に進みません。それでもころんだり、起きたり、めくらめっぽうに原の中を駆け出して行きますと、ものの五六町も行かないうちに、暗やみの中で、「おうい、おうい。」

と呼ぶ声がしました。

その声を聞くと、坊さんは、さてこそ鬼婆が追っかけて来たのがたがたふるえながら、耳をふさいでどんどん駆け出して行きました。そして心の中で悪鬼除けの呪文を一生懸命唱えていました。そのうち、

「おうい^ま待て、おうい^ま待て。」

と呼ぶ^よ 鬼婆^{おにばばあ} の声^{こえ}が^{ちか}ずんずん^{こえ}近くなって、やがておこった声で、

「やい、坊主^{ぼうず}め、あれほど見る^みな^{へや}といった部屋^みを^になぜ見た^にのだ。逃げた^にって逃が^にしはしないぞ。」

というのが、手にとる^てように聞こえる^きので、坊さん^{ぼう}はもういよいよ^{ぜったいぜつめい} 絶体絶命 とかくごをきめて、一心^{いっしん}にお経^{きょう}を唱え^{とな}ながら、走れる^{はし}だけ走^{はし}って行きました。

すると、お経^{きょう}の功德^{くどく}でしょうか、もうそろそろ夜^よが明^あけかか^{おに}ってきたので、鬼^{おに}もこわくな^{おに}ったのでしょうか、鬼^{おに}の足^{あし}がだんだん^{あいだ}のろくな^{とお}って、もうよほど間^{あいだ}が遠^{とお}くなりました。そのうちずんずん空^{そら}は明^{あか}るくな^{ひがし}ってきて、東^{そら}の空^{うすあか}が薄^そ赤^{むら}く染^{にわとり}ま^なってくると、どこかの村^{むら}で鶏^{にわとり}の鳴^なき立^たてる声^{こえ}がいさましく聞^きこえました。

もう夜^よが明^あけてしま^{おに}えばしめた^{まひる}ものです。鬼^{おに}は真^ま昼^{ひる}の光^{ひかり}にあ^{おに}ってはいくじのない^{ひかり}もの^{ひかり}です。から、うらめし^{おに}そうに、しばらくは、旅僧^{たびそう}のうしろ^{すがた}姿^{とお}を遠^{とお}くからながめて^{おに}いましたが、ふいと^{おに}姿^{すがた}が消^きえて見^みえなくなりました。

坊さん^{ぼう}はそのうち人里^{ひとざと}に出^{ひといき}て、ほっと一息^{ひといき}つき^{はな}ました。そして花^{はな}やかにさし昇^{のぼ}った朝日^{あさひ}に向^むかって手^あを合^あわせました。



安達が原他二篇

平成二十三年三月二十五日 初版

著者

楠山 正雄

発行所

藍岩堂

